疾 患 モ デ ル 通 信　2014.10　No.39

教授室を紹介いたします

大阪大学大学院老年・腎臓内科学
教授　楽木 宏実

教授職に就いて 7 年になります。その居場所である教授室を紹介させていただきます。朝 8 時半に出勤し、外に出なければそのまま夜 11 時近くまでを過ごす部屋です。実際には、外来診療、病棟回診、数え切れない会議があって部屋にいるのは半分もないかもしれないのですが、自宅に書斎を持たない身としては仕事をするのに一番落ち着く場所です。

翁面鋳物の額装

この部屋は、平成 5 年に大学が現在の吹田キャンパスに移転した時に先代教授の荻原俊男先生が使われたのが最初で、当時購入された執務用の机と椅子、応接用のソファー、木製の本棚のいくつかはそのまま 20 年以上使用しています。教授に就任した際に、スチール製の本棚を部屋の外に出して来客用のスペースを広めにし、木製本棚を一つだけ購入しました。この 7 年の間で、順次、カーペットの張替えと壁の塗り替え、ブラインドの入れ替えを行い、漸く統一感が出てきた感じです。

教授室入り口正面

先代の荻原先生は教授室に本当に多くの書籍、書類を置いておられました。今のような書類の電子化が珍しい中、当然のことです。余談ですが、最後の数年は執務スペースが足りなくなってきたのか、秘書や実験助手が昼食をとったりする教授室横の共用スペースにて執筆されていることが増えていました。もちろん、医局員の声が届く範囲にいてご自身の背中を医局員に見せておられたのですが、すぐ近くの席のスタッフは大

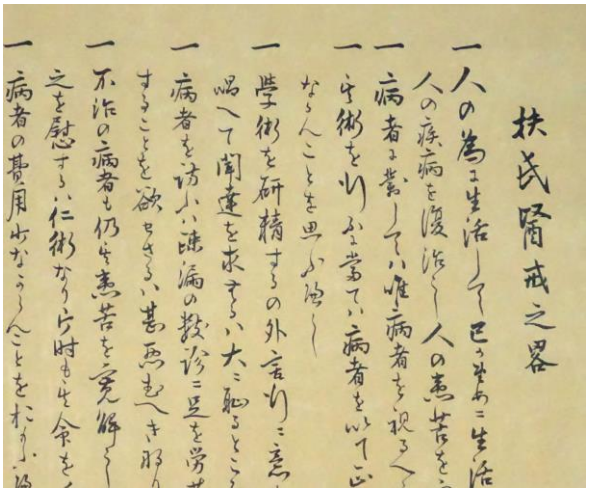
○目次

巻頭言 ・・・P1
理事会および総会報告 ・・・P3

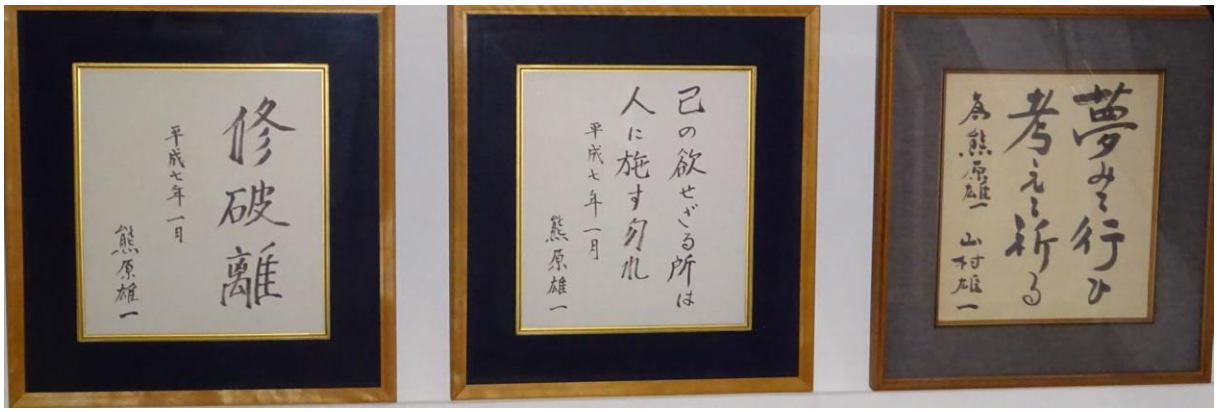
変だったかもしれません。荻原先生ご退職の折には、教授室の中の膨大な書籍と書類の大半をご自宅に持ち帰られ、あるいは破棄されました。それでも私の代になって本棚を減らしたこともあり、さらに書籍や物品の整理が必要でした。その時に引き出しの奥から出てきたのが写真にある翁の面の鋳造物です。現教室のルーツである老年病医学講座が昭和 51 年に開講して何周年目かに関係者に配布する記念品として大阪造幣局で作製いただいたものとのことです。いくつかは当時の教室員に配り、1 個だけ額装して教授室に飾らせていただきました。

先代教授の肖像

その他教授室の壁面には、初代教授 故熊原雄一先生の肖像画、荻原先生のお写真、縁起物として中之島時代から飾られているという赤富士の刺繍の額、大学のルーツでもある緒方洪庵先生の「扶氏醫戒の畧」の額装、それぞれの教授が先輩教授から頂いた 4 つの色紙の額、私が個人的に購入した書が並べられています。色紙の 4 枚は、熊原先生が故山村雄一元大阪大学総長から頂いた色紙「夢みて行ひ考えて祈る」、荻原先生が熊原先生から贈られた色紙「修破離」と「己の欲せざる所は人に施す勿れ」、そして私が荻原先生から頂いた色紙「試百難」です。それぞれに意味深い言葉で、日々の教室運営で悩んだときにふと思い出し、励ましていただいているものです。個人的に購入した書は、「運命の中に偶然はない」という第 28 代米国大統領ウッドロー・ウィルソンの言葉です。偶然目について購入したのですが、師から頂いた言葉とつなげてもぴったりとはまり込んでいます。



緒方洪庵先生『扶氏醫戒の畧』



色紙

さて、「試百難」は、2016 年の NHK 大河ドラマ「真田丸」の舞台である信州上田において、藩主真田昌幸が、徳川の大軍に対して逃げることなく周到な準備を持って迎え撃ち、守りぬいたという史実に基づいています。荻原先生の出身校の上田高等学校はこの館跡に建ち、校歌の中に「いざ百難に試みむ」という言葉が入っているそうです。

試百難

残り 10 年をきった教授人生ですが、団塊の世代が後期高齢者に突入する 2025 年問題に対処できる医学者・医療人の育成、高度医療病院においても必要となるであろう老年内科・総合診療科の専門性の確立、社会のニーズに応える老年医学研究と課題はいずれも大きなものばかりです。教授室に飾られた一つ一つの教室の歴史に後押しいただきながら、この部屋にて課題に向き合っていこうと思います。